

内容紹介

原発事故後、米国は日本政府の無策に怒っていた。在日同胞の被曝を危惧し、自衛隊の「英雄的犠牲が必要」と迫った。極秘公電を受け、菅総理は自衛隊に出動を命じ、ヘリ放水による原発冷却作戦が開始された。原発上空は、高さ30メートルで毎時247ミリシーベルトと高い放射線量だった。爆発も起きた。空中から、隊員は不安を抱きながら果敢に任務を迫行するも、米側は不満だった。「日本は情報を隠している」。時間だけが浪費された3・11直後の日米の動きを詳述する。

初出

朝日新聞 二〇一三年一月三日～一月十七日

目 次

[第1章 「米が懸念」極秘公電](#)

[第2章 「やれるうちに」](#)

[第3章 駐米大使の胸騒ぎ](#)

[第4章 「英雄的犠牲が必要」](#)

[第5章 知日派筆頭格の涙](#)

[第6章 自衛隊がやります](#)

[第7章 最高司令官の感謝](#)

[第8章 徹夜で作戦練った](#)

[第9章 急変「ちくしょう！」](#)

[第10章 おれ、死ぬのかな...](#)

[第11章 まだ生きてるだろ！](#)

[第12章 もっと入れるべきだ](#)

[第13章 勝手にしゃべるな](#)

[第14章 「何の要請もない」](#)

[第15章 米の危機感は続いた](#)

第1章 「米が懸念」極秘公電

1本の極秘公電が、2011年3月14日深夜から15日未明にかけ、米・ワシントンに駐在する駐米大使の藤崎一郎（ふじさきいちろう）（65）から外務省に届いた。

福島第一原発事故が起きて3日後。自衛隊ヘリによる原発への空中放水を、日本政府が決める前だ。

公電には、米軍トップの統合参謀本部議長、マイケル・マレンが藤崎に強く迫った文言が並んでいた。

公電はA4判の日本語の横書きで、右上に「極秘」のゴシック文字。公電には普通電・取扱注意・秘・極秘の4段階があるが、その最高レベルだ。

左上には「電信」の太字があり、上部に保存期間、文末には限定された配布先が列記されていた。電子データで送られ、印字すると透かし文字で閲覧省庁や通し番号が出る仕組みだ。

機密を漏らした場合、国家公務員法違反に問われる可能性があるため、表立って公電について認める政府関係者はいない。

藤崎は12年11月末に退任した。取材に対し、公電の存在自体を認めていない。首相として報告を受けたはずの菅直人（66）は「覚えていない」と答えた。

公電に接した複数の人物に朝日新聞が取材し、具体的な証言を得た。浮かび上がったのは、日本政府に対する米のいらだちだった。

マレンはホワイトハウスに常時出入りし、大統領と直接やりとりする立場だ。そのマレンが「日本は何をしているのか」と厳しく問いただしていた。米国は、日本政府が事故対応を東京電力任せにしている、とみていた。

14日午前、第一原発では1号機に続いて3号機が爆発していた。午後には2号機が、冷却困難に陥って炉の圧力が上昇した。

しかし、マレンの危機感は4号機に集中していた。原発の冷却に自衛隊を使え、ということにまでマレンは言及していた。

「米軍は4号機が危ないと考えている。自衛隊などを使って、あらゆる手段で冷却するべきだ」

4号機の核燃料プールには、1～3号機に比べて圧倒的に多い1535体の核燃料が入っている。プールの水がなくなるとメルトダウンが始まり、膨大な放射能が飛び散ってしまう。影響は日本全土に及ぶ。

「米国は、原発事故について、あらゆる準備がある。大統領は非常に心配している」ともあった。

マレンは「大統領」と表現していた。米軍だけでなく米国そのものが懸念している、ということだ。

外務省は、この公電を首相や関係省庁に閲覧制限をかけて回した。

極秘公電から数時間経った15日午前6時すぎ、マレンが懸念した4号機が爆発を起こした。2号機の圧力計も異常値を示した。

午前7時、米軍が今も非公表とする事態が起きる。

第一原発から約300キロ離れた米海軍横須賀基地で、放射線量の増加を告げる警報が鳴ったのだ。米軍はただちに基地内の女性と子どもを退避させた。

米海軍は、原子力空母を保有するため、放射線量の安全管理が厳しい。検知された放射能は、福島から飛散してきたと推測された。

原発がさらに悪化すれば、東アジアの重要拠点である横須賀基地が使えなくなるかもしれない。知らせを受けた米政府で焦りが広まった。

ワシントンは、原発処理に挑む姿がみえない日本に見切りをつけようとしていた。

第2章 「やれるうちに」

駐米大使からの極秘公電が日本に届いてから、1日が過ぎた。

米・ワシントン、2011年3月16日午前1時半。日本時間では同日午後のことだ。

米国務省が主催し、日本の原発事故を話し合う米関係組織の電話会議が開かれた。

参加したのは米政府の各省庁、国防総省、米原子力規制委員会、在日米大使館などの約60人。

テーマは「在日米軍と在日米国人の安全について」。1～3号機の制御失敗を受け、4号機を放置したまま東京電力が福島第一原発からの撤退を申し出たという情報も伝わっていた。4号機のプールには大量の核燃料がある。誰もが深刻な議論になると覚悟していた。

司会役は国務次官補のカート・キャンベルが務めた。国務省の東アジア・太平洋地域の担当だ。

夜が深まる中、国務省の会議専用電話番号に次々とダイヤルがあり、出席者がそろった。

米軍幹部が口火を切った。

「危険がないといえる保証は何もない」

強い危機意識だった。

続けて、米太平洋艦隊司令官の決意が代弁された。

「誰ひとり、部下を放射線にさらしたくない」

前日、米海軍は事故の今後を推測したメモを国務省や国防総省に回していた。そこにはこうあった。

「4号機の使用済み燃料プールの水がなくなって燃え出したら、東京も高い放射性物質で覆われる危険がある」

海軍は放射能の安全管理が厳しく、知識も豊富だ。その海軍がつくったメモには影響力があった。

緊迫した雰囲気満ちた。

「While we can（やれるうちに）」

会議では次第に、この言葉が繰り返されるようになった。最悪の事態まで時間がないかもしれない。やれるうちにやれることを――。

やるべきこと、が見えた。

「米軍を含め、東京近郊の米国民全員を、今すぐ避難させよう」

日本政府の決断的な行動がないことも、米側の危機感を助長した。駐日大使館や在日米軍は、家族が日本で暮らすため、切実だった。

原発事故を「電力会社内部の事故」ととらえた日本と、「大惨事の恐れのある地球的規模の災害」と判断した米国。その温度差は大きかった。

第3章 駐米大使の胸騒ぎ

在日米軍を始め、在留米国人をすぐに国外に退避させる――。

米国時間2011年3月16日午前1時半から開かれた米政府の電話会議では、この意見が大勢を占めた。

日本に米軍不在の事態が起きるが、それも辞さない。そこまでの強い決意が示された。

しかし、軍の退避はオバマ大統領の決定が必要となる。会議終了は16日の午前2時半だ。ホワイトハウスが動き出すまでは時間があつた。

国務省に特別班が編成され、避難時の想定が始まった。

日本時間では16日の午後だった。

東京近郊には、約9万人の米国人が住む。放射性物質が東京上空に達するまで数時間と見積もると、全員を避難させるのは難しい。とりあえず羽田空港と成田空港に、2機ずつ計4機の民間チャーター旅客機が確保された。

そのころ日本は、自衛隊ヘリによる原発への水の投下を試みていた。放射線量が高かったため16日は失敗、17日に再挑戦することになる。

ワシントン、16日明け方（日本時間同日夜）。

国務次官補のキャンベルのところに、スーパーコンピューターの試算が届いた。米原子力規制委員会とエネルギー省が気象情報をもとに放射性物質の拡散を計算したものだ。

結果はこうだった。

「最悪のシナリオでも、東京はなんとか被災を免れる」

東京の避難は今すぐ必要ない。キャンベルはホワイトハウスと話し合い、そう結論を出した。

米政府としての案が決まった。

一、原発から50マイル（80キロ）圏内の米国民への避難勧告。

一、政府職員の家族への自主避難許可。

米国で同様の事故が起きた場合の手順を参考に、専門家の意見も入れた。避難エリアは日本政府の「20キロ圏内」を大きく上回っていた。

キャンベルはそれらの方針を日本に知らせることにした。

もう一つ、伝えるべきことがあった。日本政府への「怒り」だ。

ワシントン、16日午前8時ごろ。

駐米大使の藤崎一郎はキャンベルに呼び出された。大使館職員3人とともに、国務省に向かった。

国務省の入り口では、スタッフがエレベーターのドアを開けて待っていた。藤崎がつぶやく。「うーん、今日はいつもと様子が違うね」

キャンベルの部屋の前で少し待たされた。

第4章 「英雄的犠牲が必要」

ワシントン、2011年3月16日午前9時（日本時間同午後10時）。米國務次官補のカート・キャンベルは、駐米大使の藤崎一郎を執務室に招じ入れた。

「朝早くに申し訳ない」

20畳ほどの部屋の一角に、小さなコーヒーテーブルと、革張りの黄色い椅子がある。キャンベルは窓を背にし、藤崎は斜め向かいに座った。国務省日本部長のラスト・デミング（71）が同席した。

キャンベルは握手も雑談もなしで切り出した。

「原発事故に、日本政府は真剣に対応していない」

いきなりの非難だった。

「日本政府の全力を挙げた対応が必要だ。政府として決断しないといけない。事故は東京電力の問題ではない。国家の問題だ」

藤崎に同行した大使館職員3人が必死にメモをとる。

「原発が非常に危険な状態になっている。それを承知で数百人の英雄的な犠牲が必要になってくる。すぐに行動を起こさないといけない」

犠牲、というひと言が日本側の耳に残った。

Heroic Sacrifice。英雄的な犠牲。決死隊の突入が必要、ということだ。

藤崎は1969年に外務省に入った。90年代後半は米国公使としてクリントン大統領の「ジャパン・パッシング」（日本外し）に向き合う。その後も北米局長などを歴任。長年にわたって米とのパイプを築き、08年から駐米大使を務めていた。

キャンベルとの付き合いも長い。「深い信頼関係があり、ツーカーの仲」と外務省内でいわれている。

そのキャンベルが藤崎に語気を強めていた。原発から80キロ圏内の米国人に避難勧告を出す、などの米政府方針をキャンベルは伝えた。

「われわれは第一の責務として、米国人を守らないといけない。日本政府が決断しないのであれば、次の段階も考えざるを得ない」

「それは米軍も含めてだ。彼らを犠牲にすることはできない」

キャンベルは席を立った。藤崎たちは急いで大使館に戻った。

同行の3人が外交公電の作成を急いだ。キャンベルの言葉、藤崎の受け答え、途中離席の様子……。一つひとつ、そのまま文字に起こした。

趣旨を説明するのではなく、読み手が雰囲気を感じられる文体。それは省内では「フジサキスタイル」として有名だった。

第5章 知日派筆頭格の涙

ワシントン、2011年3月16日昼前（日本時間17日未明）。

駐米大使の藤崎一郎は再び、国務省で国務次官補のキャンベルと向き合っていた。

朝の会談から2時間ほどたっていた。藤崎は大使館員とともに、先の会談を受けた日本政府の反応を伝えにきたのだ。

「米国人を日本から退避させるなら、どういう方法でどんなふうにするのか」と藤崎がたずねた。

国務省スタッフは、米国人の退避が政治問題になることを日本側が気にしていると思った。

キャンベルは答えた。

「これは政治関係の問題ではない。日本がサバイバルできるかどうかの問題なのだ」

責め立てるような言葉が続いた。

「事態の深刻さを日本はまだ理解していない」

「東電任せではだめだ」

「同盟国、また親しいパートナーとして、とても心配している」

そして、「英雄的犠牲」という言葉を繰り返した。

このころの日本政府の姿勢を、米国務省はどう評価していたのか。

国務省幹部がこの日、内輪で回したリポートには「FUBAR（フーバー）」という言葉が記されている。

米軍の俗語で、意味は「まるでメチャクチャ」。「Fucked Up Beyond All Recognition」の略だ。

内部リポートにはこんな言葉も連ねられていた。

「日本政府は情報を隠しているのではないか」

「目に見える対応が何ひとつなされていない」

この日、キャンベルは省内で東アジア太平洋局長会議に出席し、米国人の自主避難勧告について伝えた。

東アジアで日本は「安全な避難所」とされてきた。その日本から米国人を避難させることに、幹部たちは戸惑いの表情を見せた。

政情不安のアジア諸国から日本へ米国人を避難させることはあっても、日本から別の国に避難させることはこれまでなかった。

出席した幹部の一人は、そのときキャンベルの目に涙が浮かんでいたことを覚えている。

知日派の筆頭格で、約20年、日米の絆を深めることに力を尽くしてきた。その絆が切れるかもしれない。

「キャンベルにとって、それはつらいことだったのだろうと思う」

第6章 自衛隊がやります

極秘公電が日本に届いた後の2011年3月15日午前10時半ごろ。

防衛大臣の北沢俊美（きたざわとしみ）（74）は予定をすべてキャンセルし、緊急の幹部会議を招集した。自衛隊の原発冷却を検討するためだった。

話題は、この日、朝に爆発したばかりの4号機に集中した。極秘電で、米軍トップが4号機の危うさを懸念していたことも重なった。

防衛政策局長の高見沢将林（たかみざわのぶしげ）（57）が米国の見解を北沢に報告した。

「4号機のプールの水がカラになっている可能性がある。4号機をまず冷却すべきだといっています」

審議官の鈴木英夫（すずきひでお）（54）は、原子力安全・保安院の見方を伝えた。

「テレビ映像を見る限り、4号機は白い湯気が上がっているので、水があるはずだといっています」

1、3号機の爆発でがれきが散乱し、地上からの放水は難しくなっていた。

北沢は14日までに、首相の菅直人からヘリ放水を打診されたことがあった。米国にいわれるまでもなく、自衛隊がやるしかないと思った。

自衛隊が作成した資料には、空中、地上からの放水案、核分裂を防ぐホウ酸の投下案などがあった。

「万全の準備で実行してくれ」

北沢は陸上自衛隊トップの陸上幕僚長、火箱芳文（ひばこよしふみ）（61）に告げた。

火箱は「断固としてやります。任せてください」と答えた。

ただ、北沢は犠牲を前提とした突撃行動にはつなげたくなかった。

「隊員の安全は大丈夫なのか」

高い放射線量の中での作業になる。「今後、家族をもつ隊員は任務から外すのはどうか」ともいった。

命を投げ捨てるような英雄的行為をしなくてもいいように知恵をしぼること。それは太平洋戦争の記憶を持つ北沢なりの信念だった。

会議の直後、在日米軍司令官のバートン・フィールドから、自衛隊トップの統合幕僚長、折木良一（おりきりょういち）（62）に電話があった。

「4号機のプールに上から水を入れれないといけない」。極秘公電を念押しするような内容だった。

同日午後2時。東京電力の課長級2人が防衛省で鈴木らと会った。

原子炉建屋の構造や周辺の鉄塔の高さなど、ヘリの活動に不可欠な情報を求めている。しかし2人が持ってきたのは、敷地内の平面図だけ。放水に役立つ情報は何も無い。

「あなたたち、いったい何をしにきたの」。鈴木は声を荒らげた。

第7章 最高司令官の感謝

2011年3月15日午後、防衛省。自衛隊のヘリを使った原発冷却の素案がまとまった。

そのころ、首相官邸5階の執務室で、首相の菅直人は悩んでいた。

首相は自衛隊の最高司令官だ。外国の侵略であれば、ためらうことなく自衛隊に出動の命令を出せる。だが今は国内の原発事故であり、放射能という見えない災害に攻められているのだ。どう決断すべきか。

チェルノブイリ原発事故で、軍隊が決死隊として突入している。そのことが頭にあった。それと同様に、自衛隊に「行け」といえるのか。

そもそも法律的には事故収束は東京電力がすべきだ。しかし決断できるのは首相の自分だけだ……。

午後3時58分、防衛大臣の北沢俊美が執務室に入ってきた。ヘリ放水案のペーパーを手にしている。

「犠牲が出ないように万全の態勢で放水作業をする案をつくりました。いかがでしょうか」

「ありがたい、ありがたいです」

菅は感謝を繰り返した。

北沢に同行した自衛隊トップの統合幕僚長、折木良一が素案に沿って説明し、いい添えた。

「国民の命を守るのがわれわれの仕事ですから、命令があれば全力を尽くします」

「ありがたいです」

菅はまた繰り返した。自衛隊の出動は、例のない命令となる。折木の一言が心強かった。

早朝からこの会議までに、駐米大使からは、政府・東電の事故対策統合本部に「米国が自衛隊を使えといっている」との電話も入っていた。

菅はこの場でただちに、自衛隊に原発冷却の放水を命令した。

3号機は空からヘリで放水する。4号機は、水を落とすと水蒸気爆発する可能性があるため、地上から放水する。決行は明日16日――。

菅の命令は、折木から命令系統を通じて現場に下りる。

ヘリ放水は、陸上自衛隊の第1ヘリコプター団が担うことになった。

隊員約700人、大型輸送ヘリCH47など三十数機を保有する部隊だ。仙台の霞目（かすみのめ）駐屯地を拠点に救援物資を被災地に運んでいた。

霞目以外の駐屯地にも、放射線を遮蔽（しゃへい）するための鉛板や防護シートが続々と運ばれてきた。

隊員の間でささやきが起きた。

「おれたちは第一原発に使われるようだ」

「原発に行ったら死ぬんじゃないか」

第8章 徹夜で作戦練った

震災4日後の3月15日深夜。

陸上自衛隊第1ヘリコプター団の群長で1佐の大西正浩（おおにしまさひろ）（51）は、仙台の霞目（かすみのめ）駐屯地で、大学ノートに鉛筆で必死に計画案を書いていた。

ヘリ団は、山火事を空中放水で消す経験が豊富だ。大西は、福島第一原発への放水作戦を立案するよう上官からいわれていた。

いつもなら、任務の計画はヘリの操縦士らが担う。

だが、今回は実行が翌日に迫り時間がない。満足な訓練も望めない。

「計画づくりは任せてくれ」

乗員らは早めに休ませ、徹夜の作戦立案だった。

作戦の構想はシンプルだ。ヘリに吊（つ）った巨大な袋から、7・5トンの海水を一気に落とす。

ただ今回は、隊員の被曝（ひばく）量を抑えつつ、正確に水を投下しなければならない。難しかった。

低空で停止して放水すれば狙いを定めやすいが、被曝量は高い。ヘリを移動させながら水を落とす方法しかなかった。

隊員の安全と放水の確実性。二つを課題にノートに試算を繰り返す。

結論が出た。速度20ノット（時速約37キロ）で高度300フィート（約91メートル）なら一定の効果が期待できる。線量が毎時60ミリシーベルトとすると、放水時の隊員の被曝量も0・236ミリシーベルトと低く抑えられる。

ノートのデータをもとにパソコンに向かう。放水の手順が一目でわかるイラストを加え、「空中放水実施要領」の資料を仕上げた。

さらに、ヘリ内部用に放射線を遮断する機材をかき集めた。

大西は、北海道大を中退して入隊した。防衛大学校に入り直し幹部になったが、つねに第一線の隊員の負担を忘れないようにしていた。

16日早朝。隊員に資料を配る。腹を決めた顔もあれば、不安がにじむ顔もある。

こんな作戦は誰だってやりたくないだろう。大西は隊員の心中を想像した。

午後4時、ヘリが飛び立った。しかし、原発上空の放射線量が、高さ100フィート（約30メートル）で、毎時247ミリシーベルトと作業の限界値を超えていた。放水は見送られた。

官邸や防衛省に失望感が広がった。だが、収穫もあった。「水がない恐れがある」と米軍が指摘していた4号機の核燃料プールに、きらきら光る水面が確認されたのだ。

ヘリ放水は、3号機が最優先となった。

第9章 急変「ちくしょう！」

「明日は何とかやってほしい」

ヘリからの空中放水が中止となった2011年3月16日。首相の菅直人は夜、防衛省に指示を出した。

省内では、ヘリ隊員の被曝（ひばく）量はそれほど高くならない、次はやり遂げる、との見解でまとまった。

命令はすぐ、雪がちらつく仙台の霞目（かすみのめ）駐屯地に伝わった。

第1ヘリコプター団の群長、大西正浩に、ヘリ団長の陸将補、金丸章彦（かなまるあきひこ）（51）から電話があった。

「明日は必ず、１回撒（ま）け」

短い命令だった。

大西は少し間を置き、答えた。

「……わかりました」

自衛隊ではふつう、命令に対して「了解しました」と答える。

だが、大西は、命令に引っかかりがある時に自分が使う「わかりました」を選んだ。小さな抵抗だった。

明日は、原発上空の放射線量に関係なく、必ず放水しろ――。

これが命令の真意だった。

同じ時間帯のワシントンでは、米国務次官補が「英雄的犠牲が必要」と日本側に迫っていた。

大西にとって、わずかな望みは空中放水より先に予定されている地上放水だった。実施されれば、上空の線量は下がるはずだ。

決行の１７日を迎えた。午前７時半、金丸から突然電話が入った。

「今すぐ、向かえ」

地上放水より、空中放水が先に行われることになった。

「……わかりました」

大西は受話器を握りしめ、「出動準備に１００分下さい」といった。周りの隊員も予定の急変を悟った。

大西は電話をたたき切り叫んだ。

「ちくしょう！」

隊員に十分な安全と訓練を与えたいのに、それすらさせてやれない。自分への怒りがこみ上げた。

大西の怒鳴り声に隊員は固まった。ベテランの操縦士で３佐の伊藤輝紀（いとうてるき）（４２）は、大西の悔しさも背負って声をあげた。自分たちがやることは一つだ。

「早く準備しろ、行くぞ！」

ヘリ放水を優先したのは、官邸の判断だった。

１７日午前、菅とオバマ大統領の電話会談の予定があった。大統領は、極秘公電にあったように、東京電力任せの対処を懸念していた。

霞目駐屯地から約９０キロ先。伊藤らのヘリが向かう３号機では、前日朝から白煙が上がり続けている。放射性物質がまじった湯気が、どんどん広がっていた。

第10章 おれ、死ぬのかな...

震災6日後の3月17日朝、突然の出動命令が出た。

午前9時前、第1ヘリコプター団の大型輸送ヘリCH47が3機、仙台の霞目（かすみのめ）駐屯地を飛び立つ。
隊員は鉛のベストや防護マスクを身につけた。ベストは重さが20キロもある。安定ヨウ素剤を2錠飲んだ。

先導機整備員の曹長、木村努（きむらつとむ）（４２）は錠剤の真っ赤な包装にどきりとした。先導機の乗員は、隊長で２佐の加藤憲司（かとうけんじ）（４１）、機長で３佐の伊藤輝紀ら操縦士２人、整備員２人の５人編成だった。２機が放水に向かい、１機は後方支援だ。

木村の任務は、機体中央の床にあるハッチから原発を見下ろし、ボタンを押して、下に吊（つ）った巨大な袋から海水を命中させることだ。

ハッチ前で四つんばいになり、線量計をそばに置いた。

機はすぐ東の海に出て、袋に７・５トンの海水をくんだ。海岸を右下に見て一直線に南下する。

木村はいつもより短い１５分おきに計器の異常がないことを告げた。

「メンテナンスパネル、ノーマル」

訓練で何度も通った東北だが、眼下の風景は一変していた。

次女の瑠花（るか）の笑顔が頭に浮かんだ。１歳の誕生日が２週間後だ。

ヘリが上空に達した瞬間に原発が爆発する——。そんな場面が頭に浮かんだ。瑠花の１歳も見られないまま、おれ、死ぬのかな……。

乗員の選考は現場に任されていた。木村は前夜、整備員１０人に意向を聞く。黙っていたので、未婚の若い隊員を外すといった。

「行かせてほしい」。若手２人は食い下がったが後方支援に回した。

「数値、１００！」

副操縦士の大声ではっとした。それまでゼロだった線量計の数値が上がり始めた。

全身から汗がどつと噴き出た。過呼吸気味。よだれ、鼻水も出た。

隣の後輩整備員に動揺を見せないよう横を向いた。４秒かけて息を吸い、４秒かけて吐く——。習った対処法を４、５回やって落ち着いた。

９時４８分、３号機に近づく。むき出しの骨組み。煙が上がっていた。

「放水用意！」

伊藤の声で、木村は後輩と２人で放水ボタンに親指をかけた。

機体は作戦計画の３００フィート（約９１メートル）より低い高度で進入していく。

作戦を立てたヘリ団群長で１佐の大西正浩は、霞目駐屯地でテレビ中継を見ながら叫んだ。「それ以上、高度を下げるな！」

第11章 まだ生きてるだろ！

震災6日後の3月17日午前9時48分。陸上自衛隊第1ヘリ団の先導機が福島第一原発3号機の上に差しかかった。

機長で3佐の操縦士、伊藤輝紀が左手の動力レバーを前に押し、右手の操縦桿（かん）を引く。事前の作戦より高度を低く、ゆっくり飛ばした。

両足の隙間から建屋を見下ろし、見えなくなる瞬間、号令した。

「放水！」

さらに減速させ、ホバリングに近い状態になったとき、整備員がボタンを押した。7・5トンの海水が天井のない建屋に吸い込まれていく。

伊藤は、機体が軽くなるのを座席の尻で感じた。

作戦資料には250ミリシーベルトが黄色で強調され、「臨床的観察が必要」と記されていた。累積線量が250ミリに達したら人体への影響が心配される、という意味だ。

隊員の脳裏には250という数値が刻み込まれていた。そのとき副操縦士が線量計を見ながら叫んだ。

「256！ もう死んでしまいます！」

伊藤が叫び返す。

「まだ生きてるだろ！」

急いで現場を離れようとしたとき、無線が鳴りだした。

「ヘリ団長からの命令。各機、もう一度、放水を実施せよ」

命令を転送したのは空自の管制だった。放射線数値を聞かれ、副操縦士が「2、5、6！」と答える。

1回でいいっていうから目いっぱい頑張ったのに、なんだよ。伊藤は心の中でつぶやきながら海で水をくみ、再び3号機に向かった。

2機が2回ずつ計4回放水した。

任務後、20キロ南のJヴィレッジに着陸した。エンジンを切ると、副操縦士が泣きだした。

「おれは被曝（ひばく）しちゃってる」

伊藤は「泣くな」と叱りながら、責任を感じた。操縦士の選考では、意向を聞かずに連れてきたからだ。

鉛のベストを脱いで機を降りると、待機していた後方支援機の機長が走ってきた。「見せてみろ」と副操縦士の線量計を手を取る。

「マイクロだろ、大丈夫だよ」

マイクロシーベルトを、1千倍のミリと勘違いしていたのだ。

伊藤は生きている心地がした。

放水30分後、首相の菅直人は米大統領のバラク・オバマとの電話会談で「自衛隊をはじめ、日本は全力で原発に対処している」と話した。

オバマは「日本は努力していると思う」と答えてきた。

第12章 もっと入れるべきだ

自衛隊によるヘリ放水が成功した後の3月17日午前11時40分。

米原子力規制委員会（NRC）のチャールズ・カストが防衛大臣の北沢俊美と大臣室で会った。

NRCは震災直後、原発事故の処理に協力するため、専門家チームを日本に派遣していた。カストは、そのトップだった。

だが東京電力や原子力安全・保安院など、どこにいても詳しい情報が手に入らない。日本側の窓口がどこなのかも、はっきりしない。たどり着いたのが防衛省だった。

カストはまず、ヘリ放水について指摘した。

「冷却効果は限定的だ」

「放水量が足りない。もっと入れるべきだ」

決死のヘリ放水への評価は厳しかった。

北沢は、うなずきながら聞いた。防衛省としても、放水の量が足りないことぐらい分かっていた。

カストは、質問を重ねた。

「原子炉の状況を教えてほしい」

同席していた審議官の鈴木英夫が保安院からの情報を伝えた。

本来なら、保安院に直接聞くべき情報だ。それをカストがあえて、防衛省に求めたのには理由があった。

3日前の14日、「NRCの専門家を官邸に常駐させてほしい」と米駐日大使のジョン・ルースが官邸に求めたが、難色を示された。それもあって、米国では「日本は情報を隠している」との批判が出ていた。

日米間がぎくしゃくする。懸念した首相の菅直人が、「米との間を取り持つてほしい」と北沢に頼み、こぎつけた会談だった。

カストは米国が懸念する4号機に話題を移した。

防衛省は、ヘリから水面を目視したと説明する。

「そうならば、原子炉の温度と放射線量を知りたい」

北沢は、すぐ調査するよう指示を出す。後日、第1ヘリ団が再び命令を受け、原発上空へ飛んだ。

NRCと、日本側の関係省庁との会議は、翌18日から開かれることになった。日米で情報を共有するためだった。

日本側からは保安院、東電、外務省、防衛省の参加が決まった。

米側は、日本と協力して事態を収拾したいと望んでいた。

しかし、日本側の足並みは、なかなかそろわない。日米の思惑は、ねじれたまま進んでいった。

第13章 勝手にしゃべるな

2011年3月18日午前10時、防衛省。

前日の会談を受け、米原子力規制委員会（NRC）と、日本側による会議が始まった。米軍、在日米大使館も同席した。

会議を主催したのは、官邸の意向を受けた防衛省だ。防衛政策局長の高見沢将林（のぶしげ）が切り出す。

「会議の存在を秘匿にする。各省内でさえ、話さないでほしい」

出席者同士の情報共有という意識に、初めから疑問符がついた。

高見沢の手元には、米軍が支援できるとする項目のリストがあった。放射能の管理や除染、化学技術の提供……。

項目は数十個に及ぶ。

しかし、高見沢はリストの一部を読み上げただけだった。参加者には配られず、メモだけが許された。防衛省はリストを機密扱いとしていた。

翌19日午後4時40分の会議には、原子力安全・保安院から審議官の根井寿規（ねいひさのり）らが出席した。

NRCは全面協力の姿勢で会合に臨み、原発の状況をたずねた。しかし、保安院の対応は素っ気なく、「担当でないのわからない」と繰り返すばかり。議論しても無駄、との姿勢だった。

NRCスタッフは声を荒らげた。

「協力したいのに、これではできないではないか。情報を提供してほしい」

防衛省の審議官、鈴木英夫が「協力したいと言っているんだから」と促す。しかし、保安院は態度を変えなかった。

かたくなさの裏には、経済産業省からの「中身のわからない会合で、勝手にしゃべるな」との指示があった。

その半面、経済産業相の海江田万里（かいえだばんり）（63）は、防衛相の北沢俊美の携帯電話に連絡し「米軍のリストがほしい」と依頼している。

東京電力からは技術者ではなく、総務系の幹部が出席した。NRCの技術的な質問に答えられず、「戻って伝える」というばかりだった。

外務省の課長補佐は、自己紹介を除けば、口を開かなかった。

それぞれの責務さえ明確でないまま、時間だけが浪費された。米側の不満と不信がさらに募る。

それがやっと修復に向かうのは、官邸が主導し、各省庁を一堂に集めて窓口を一本化した「日米協議」が22日に開かれてからだ。

震災発生から、11日が経っていた。

第14章 「何の要請もない」

米国と日本の認識のずれは、支援活動でも起きた。

米大統領のオバマは2011年3月12日、首相の菅直人に電話で「あらゆる支援を行う用意がある」と伝えた。これを受けて防衛省は、日米調整所を現地の仙台駐屯地、米軍横田基地、防衛省の3カ所につくった。

15日、陸上幕僚監部の防衛交流班長の1佐、広恵次郎（ひろえじろう）（46）が仙台の窓口役として派遣された。

広恵が駐屯地の建物に入ると、すでに20人ほど、迷彩服姿の米兵がいた。

沖縄の基地からやってきた米海兵隊第3海兵遠征軍の部隊だ。日本側の要請がないため、何をしていたかわからない。

暖房もない階段の踊り場で、パソコンを開いて凍える手で情報を収集していた。

翌16日、最初の日米合同会議を開いた。遠征軍の大佐、クリストファー・コークは何度も繰り返した。

「Tell me whatever you want（何でも言ってくれ）」

コークによると、彼らは震災2日後の13日に駆けつけた。「すぐに手助けをしたいのに、何の要請もないし、情報もない」。広恵は、いら立ちと日本への不信感を感じた。

自衛隊は14日、仙台で、被災地支援で陸海空を一元運用する統合任務部隊を発足させていた。だが物流のシステムが固まるのは、その1週間後だ。そんな状態で、米軍との連携作業まで手が回らなかったのだ。

広恵は「あと2、3日待ってくれ」と頭を下げるしかなかった。

04年のインドネシアのスマトラ沖地震と津波で、米軍ヘリが、救援物資を空から落として歓迎されたケースを引き合いにだした。

「日本の感覚でいえばかえって逆効果だ。支援は秩序正しくやらねばならない。もう少し待ってくれ」

広恵はそんな調整に、かなりの時間を割かなければならなかった。

やっとリズムが合ってきたのは、災害から10日ぐらい後からだった。

広恵の調整で、海兵隊部隊が、港の壊滅した宮城県気仙沼市大島に出動。復旧を一手に引き受けた。

ブルドーザーで一気に、という作業ではなかった。米兵は散乱したアルバムや財布などを、まず手作業で丁寧にひろい上げた。

「トモダチ作戦」には、最大時で約1万6千人を投入した。仙台空港の復旧、新学期を控えた学校の清掃まで黙々と手伝った。

第15章 米の危機感は続いた

ワシントン2011年3月29日午後4時半（日本時間30日午前5時半）。

米軍トップの統合参謀本部議長、マイケル・マレンは、駐米大使の藤崎一郎を米国防総省に呼んだ。マレンは震災3日後の14日、自衛隊による放水を藤崎に迫っている。それから2週間後だった。

第一原発の燃料プールの冷却では、消防車による地上放水から、配管を使う作業に切り替わっていた。

マレンはそれでも、冷却を強化するよう要望した。

「原発は安定していない。予断を許さない状況だ」

米の危機感は続いていた。

28日、東京電力。

政府・東電の統合対策本部会議に出席させるよう、米軍の准将が副社長の武藤米（むとうさかえ）（62）らに求めている。

「リアルタイムの情報が必要だ」

米軍は危機的な災害に出動し、米国人の安全を確保する。その方針は国内でも、国外でも同じだ。

「在日米国人を守るため、現状認識を完璧にしたい」

准将が訴えると、会議への参加が認められることになった。

12年末、震災当時に米国務省日本部長だったラスト・デミングに取材した。藤崎が国務次官補のカート・キャンベルに会ったとき、同席していた人物だ。

「米国は、日本政府が福島危機に対応策があるのかを最も懸念していた。情報が正確に早く入らず、日本に不信感があった」

日本は、原子力災害対策特別措置法で、原発事故の対応は、事業者の電力会社に一義的責任がある。

結局、ヘリ放水が実施されたのは震災から6日後、米との窓口が一本化されたのは11日後だった。

米国は1979年、炉心溶融したスリーマイル島事故が起きた。

「そのとき、対応は事業者任せで1週間ほど混乱した。米国はそれを教訓に危機管理を組み立て直した。日本も同じように改善するだろう」

最後に、こう問いかけた。

日本が今回の事故を収めきれなかったら、米国はどう動いたのか。

「仮定の質問には、答えない」

デミングは話を打ち切った。

プロメテウスの罠〔23〕 日本への不信「英雄的犠牲を求める」

著 者 朝日新聞（板橋洋佳、野上英文）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年2月8日 WEB新書版発行

2013年11月30日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-001-4

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年2月8日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。